swarm bonds――叙情的な魔法少女たちと追憶のHero

瀬津

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ｓｗａｒｍ　ｂｏｎｄｓ――叙情的な魔法少女たちと追憶のＨｅｒｏ

【Ｎコード】

Ｎ１０１６ＢＡ

【作者名】

瀬津

【あらすじ】

ＦＦ、テイルズ、遊戯王等がクロス予定のリリカルなのはの小説です。時間軸はｓｔｓ本編開始から少し経ったところ。基本的に原作に沿ったストーリー展開の予定ですが、それなりの変更も十分可能性あります。キャラの方も、変わっているかもです

turn0（前書き）

初投稿です。一発書きクオリティですので過度の期待はしないでください……

今回はプロローグです。なのはキャラは出ないのでアシカラズ

turn0

――アーククレイドルの崩壊は止まらない。

紅いヘルメットを付け、黒髪の青年は、Dホイールでその城の中核へと駆け出す。

（……間に合うか？！）

不安の中、必死にDホイールのエンジンを回転させ、やがて彼はその心臓部に至った。

この城の中心部であるモーメント機関が、マイナス回転を続ける限り、崩壊は止まらない。

そして、マイナス回転を止める唯一の方法が青年――不動遊星がモーメントにDホイールごと衝突し、正常な回転に戻すことだった。

だが、それは自身の命を犠牲にするのと同義。それでも遊星はこの天空城の下にある街を護りたかった。

彼が生まれた街

彼と彼の友が過ごした街

数多の危機と共に生き抜いた街

そこにある想い出を護らんとする意思が、彼をこの死へと続く門に走らせた。

だが、運命は彼にその選択を選ばせなかったのである。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

クラウド・ストライフは、しがない運び屋である。

閑古鳥が二、三匹常駐しているような仕事量ではあれど、今のほぼ根無し草な状況を鑑みれば、まぁ商売の出来は良い方である。

そんな彼が、ある街をふらりと訪れた時だった。その街にいる知り合いに、ある事を依頼された。

依頼内容は、要するに「調査」だ。

市街地から大分離れた所にある廃屋に、突如不思議な図形が現れたので、取り壊す前に、何か変な仕掛けが無いか調べて欲しいのだそうだ。

（……如何わしい仕事を引き受けたものだ）

「廃屋」「図形」「市街地から大分離れた」――この三つのキーワードを聞いて、この世に関わろうと思う者がいるだろうか――いや、少なくとも一人いるか。

などとどうでも良い事を考えながらでも、地図の通りにバイクを走らせれば目的地に着くのである――否が応でも

「……凄いな」

思わず誰も居ないのに呟いてしまうほどの、見事なボロ屋。二階建てなのだが、屋根は抜けている上に、壁は所々等という騒ぎではない。全体的に塗装が剥げている。周りは雑草が生え放題の上、それは家の中にまで及んでいる。

クラウドは、愛車にダイヤル式の鍵を掛け、念のため、自身の得物

をフル装備の状態で背中に背負い込んだ。

中も見事に荒れ放題だった。木製の家具は当然のように朽ち果て、陶器で出来た食器は、埃あるいは泥を被っている。おかげで、陰惨な感じしか抱けない。

「……ハァ」

思わず嘆息してしまうほどの荒れ具合だった。

予想は出来ていたが、これは酷い。こんな風になるまで、何故放置していたのだか。

（まぁ、解体するのは俺ではないから別に良いが）

意味をなさい憤りを感じつつ、その家屋に土足で踏み込む。

何はともあれ、依頼は遂行しよう。

（二階の書斎と言っていたな……）

踏み抜かれた様な跡がある、古ぼけた木製の階段を上がり、そのまま廊下を突っ切り、奥にある形の歪んだドアを開く。

「……」

確かに、そこの床に図形があった――淡い紅色に発光している魔法陣が。

その書斎らしき部屋は、本棚以外の家具は無い。いや、むしろ壁自体が本棚とでも表現できるほどズラリと並べられている。そして、そこには本がひたすら、ある種の厳格さを発し続けるように並んでいる。

その魔法陣らしきものは、そういった物を自身の色に薄く染めながら、そこに居た。

クラウドは、身を緊張させながら、その魔法陣に徐々に近づいて

いく。
何かの罠か、だとしたら、何なんだと言うのだ、これは。
このまま何もしないで帰るのは、契約違反だ――だが
（何か……危険な感じがする）
そんな予感とも言うべき感覚を受け、クラウドはその光源に触れる事を渋る。
（……いや、こんな物におびえてどうするというんだ。とりあえず、どのような物か位の見当は付けなければ）
不安を振り切り、クラウドはそれに触れた。その瞬間――
「！」
その魔法陣は光を一層強めた。そのまま、光はクラウドを包み込み、光が消えた後には――
静寂しか、残らなかった。

turn0（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます。感想やツッコミ「意☆味☆不☆明だからここ解説しろ」等もお待ちしております

turn1　『クラウド・ストライフ』（前書き）

誰か待っていてくれたのでしょうか第一話です。やっとリリカル組登場です。
相変わらず読みにくい文章ですが、読んでくれると幸いです。

turn1　『クラウド・ストライフ』

第一管理世界ミッドチルダ。
ほぼ無限にあるといわれる次元世界の中で、もっとも魔法技術が発展しており、時空管理局の本部がある世界でもある。
中央部には多数のビルティングが乱立し、大型都市として大いに賑わっている。
そのミッドチルダにある、機動六課の隊舎は湾岸地区にある。地理の関係上、陸路での移動には若干不向きであれど、空を用いての移動手段には利便性がある。

そして、そんな機動六課の敷地内をよぼよぼと歩く四つの人影。
進行方向から向かって一番右側の少女はショルダーホルスターを付けている。髪は橙色。腰まであるその長い髪を所謂ツインテールにして結んでいる。つり目がちの目が、若干キツい印象を与えている。
そのすぐ隣りの少女は深い青をした髪をサッパリとショートカットにしている。如何にも活発そうである。顔つきは、人懐っこそうな顔をしている。
青い髪をした少女――スバル・ナカジマは、隣のツインテールの少女――ティアナ・ランスターに向かって、こぼすように呻いた。

「あ～、今日の午前錬は疲れたー……」
「今日『も』でしょうが……」

精根尽き果てたと言わんばかりにぼやく二人に、赤い髪をした少年は同意と共に苦笑いを浮かべた。

「……ハハッ。確かに今日もキツかったですね……」

「そんなこと言ってる割に、エリオはまだまだ行けそうじゃない……」
「そう見えるだけですよ……」
ティアナの指摘にそう答えた後、少年――エリオ・モンディアルは、二の腕を擦った。
「全身筋肉痛ですし、何より……腕は肉離れの一歩手前みたいな状態で」
「大丈夫、エリオ君？」
隣に居る桃色の髪をした少女は、案ずるようにエリオの顔を覗き込んだ」
「ありがとう、キャロ。心配しなくても大丈夫だよ」
エリオは、自身の身を案じてくれたキャロに笑顔でそう告げる――痛みと疲労で引き攣っているかどうか分からないが。
「全然ダメそうなんだけれども……？　ね、フリード」
キャロの腕の中に納まっている白い小さな竜は、持ち主の問いかけに対して、きゅくるーと一鳴きした。

そんな取り留めの無い会話をしながら、四人は林と隣接する舗装路に差し掛かった。
その時、エリオは不思議な感覚に襲われた。
（……？）
変に思ったが、すぐに気にするのは止めた。だが、その直後――彼は止まり、横にある林をじっと見た。何故かは分からないが、何となくそこに誰かが「居る」気がした。

「この林に、誰か居ますね」

突然のエリオの発言に対して、ティアナは眉をひそめた。

「はぁ？　何、変なこと言ってんのアンタ？」

「イヤ、でもしますよ。人の気配。確実にここに居ます」

「……あのね、私はそんなもん分かんないんだけど」

「おれ、少し行ってきます！」

「ああ、ちょっと！」

ティアナが制止する暇もなく、エリオは走り出した。

「皆さんは先に戻っててくださーい！」

走りながら皆にそう言い、エリオは雑木林の奥へと去っていく。

「なによ、あいつ……」

突然「何か居る」と言ってさっさと行ってしまったエリオに、ティアナは不満げに声を漏らした。

「でも、嘘は言っているようには見えなかったよ？」

「……そうなのよねー」

スバルの意見に同意はするが、彼女は、別のことを考えていた。

（このまま、あいつの言う通りにすれば――まぁ、昼食には間に合うけど）

だが、それではダメなような気がするのである。チームメイトを置いてけぼりとは、少々冷たいではないか。

「追いかけましょう。ティアナさん」

「キャロ……」

「エリオ君が、何の確証も無しに、ああいうことはしないと思うんです」
「うーん……」
考える事数秒。答えはあっさりと出てきた。
「よし、じゃあとっととエリオに追いつくわよ！　ランチ終了の前に！」
「オッケー！」
「ハイ！」
エリオの言う通りにして、この三人で帰っても、ここで待っていても、仕方が無い。そう判断したティアナは、二人を引き連れ、彼の後を追った。

二、三分走ったところで、ティア達はエリオを発見した。どうやら、倒れている人間の安否を確認しているところのようだ。

「エリオ君……！」
「あっ、三人とも……」
キャロに呼ばれるまで、気付きもしなかったらしく、エリオは驚いたように顔を上げた。
「……気配の正体は、この人？」
「はい、恐らく。今、状態を確認したんですが、恐らく気絶しているだけかなと」
「ふ～ん」
エリオとその倒れている人物との位置の関係上、見えなかった顔が、見えるようになった。
「へぇ、結構かっこいいじゃん」

スバルはその容貌を見て、そう評したが、あながち間違いではない。

目鼻顔立ちはよく整っている。歳の頃は、見た限りではうちの部隊長と同じか少し上くらい。髪は若干くすんだ金髪で、それを逆立たせている。

服装は、黒のズボンに黒のハイネック。肩当てが左側についており、そちらは手首まで隠れるような長袖であるのに対し、右のほうは袖なし。そして腰からは革の黒い腰布（？）のようなものが伸びている。

「でもこの人、どこから来たんでしょう……？」
「案外、酔っ払いか何かだったりしてー」
「酔っ払いが、何の用があって機動六課に来るのよ……」

それに、と言ってティアナは、目の前で転がっている《それ》を両手で持ち上げた。

「こんなバカでっかい剣、持ち歩いて酒飲むなんて有り得ないでしょうが」
「……あ、あはは。確かに」

スバルも《それ》を見て、頭を掻きながら納得した。
それは巨大な剣。大きさは１６０センチほどはあるだろう。ティアナには、両手を使っても持ち上げられない重さをだった。

「まぁ、こんなところで伸びているなんて、どうせ普通の理由なんて有り得ないわよ」

そう言って、ティアナは今度はエリオに顔を向けた。
「……で、どうすんのよ、エリオ」
「え？」
「え？　じゃないでしょ。連れて帰るんでしょ？　隊舎に」
「はい……そのつもりだったんですが」
「何よ？」
「こんな、身元も分からない人を、隊舎に連れて行って大丈夫なんでしょうか？」

なるほど。その懸念はもっともだと言うべきか

機動六課は、あくまで治安維持組織の末端。一般人に教えるワケにはいけないモノもある。敵対する組織の人間――例えばテロリストだったり、犯行グループといった輩である――ならばなおさらである。そこに、一般人なのかどころか、どこの誰だかよく分からない人間を入れていいのか？　しかし、目の前の青年は、パッと見て異常はないとはいえ、もしかしたら、何かしらの病に陥っていたり、はたまた何者かに命を狙われている可能性だってありえなくはない。何はともあれ『助けられるのなら助けたい』のだ。エリオの性分の上においては、その感情がもっとも強いのだ。

しかし、だからといってそう、ホイホイ人を招き入れるワケには行かないのが現実である。彼は故に悩んでいるのである。

「いいと思うよ？」

そんな少年の逡巡をよそに、割とあっさり答えたのは、ティアナではなく、スバルだった。
「さっきティアも言ってたけど、こんな所で気絶者、なんて普通有り得ないよ。何か理由があるはずなんだから、機動六課の人間が、

事情聴取するために隊舎まで連行――って、筋が通ってると思うなー」
「そ、そうですよね？」
「それに――」
「それに？」
そこでスバルは、ニッと笑ってこう言った。
「既に居るじゃん。似たような人が」

＊　＊　＊　＊　＊

目を覚ましたら、そこには白い天井。
「……む」
一つ唸って、仰向けに寝ていた身体を起こす。覚醒して間もない頭で、自分が何をしていたかを想起する。
（……どうしたんだ、おれは……ああ、確か廃屋の魔法陣を調べて、そこで意識が――）
「あ、起きましたか」
突然声を掛けられ、振り向くと、そこには、白衣を着た女医らしき人物が立っていた。金髪をショートボブにした女性だ。白衣の下には、茶褐色のスーツが見え隠れしている。
「気分はどうですか？」

「……普通だ」
「そうですか。良かったです」
答えると、にこやかに笑って、女性は名を名乗った。
「私はシャマル。ここ『機動六課』で、主治医の席に着いている者です」
「……クラウドだ」
クラウドは名を告げ、辺りを再び見回した。
「ここは、どこだ？」
周りには、見た事もないような機械。そして、窓からは見た事がないような背の高い建物が、霞んで見える。二年前の旅で、世界を駆け巡ったクラウドだが、こんな場所は、見た事がない。
「えっと……ミッドチルダ南駐屯地内Ａ７３区画にある、機動六課の隊舎内ですけど」
「ミッドチルダ？　ミッドガルじゃなくてか？」
「はい、ミッドチルダです」
「……」
おかしい。ミッドチルダなんて見たことも聞いたこと来たこともない。機動六課などというものも同じだ。
「……俺は、どうしてここに居る？」
「六課の施設内の緑地のど真ん中に倒れていたのを、うちの隊の子たちが見つけてくれたそうですよ」
「……そうか」

分からない事だらけで、最早考える余地もない。おそらくは、あの魔法陣の所為でワープか何かしたのだろうが、分かったところで何が出来るというわけではない。

「あの、クラウドさん？」

「……なんだ」

「これから、幾つかの質問をするために、こちらに部隊長が来るんですが、クラウドさんは質問にキチンと答えてくださいね？」

『部隊長』というのは、おそらくさっき言っていた『機動六課』の部隊長なのだろう。正直、この最悪な気分の中で、頭の固い中年と話したくはないのだが、曲がりなりにも助けてもらった側らしいので、嫌だとも言えず、黙ってうなずいた。

「ふふっ、では呼んできますね？　余り緊張しないでいいですから」

そう言って、シャマルは自動ドアの向こうへと消えていった。正直、人見知りな彼に、緊張するな、というのは無理な相談であった。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「機動六課部隊長、八神はやて二等陸佐です。以後お見知りおきを、クラウドさん」

日も暮れかかった時間帯に、その人物は部屋に入ってきた。

でっぷり太った嫌味な中年男性が来るかと思っていたら、目の前

に現れたのは、自分と同じくらいの歳の女性。しかも所謂上物。

全体的に小柄。髪は茶のショートなのだが、斜めに交差するような髪飾りを付けている。服装は、先ほどの女医と白衣の有無以外に服装の差は見当たらない。同じ所属か、はたまたこれが部隊全体の制服なのか。

「お疲れのところ、悪いのですけれども、早速質問に入らせていただきます」

「……ああ」

クラウドが寝ているベッドの隣に丸イスを置いて、そこにチョコンと座り、八神はやては、手にクリップボードを持って、質問を始めた。

「まず一つ、職業は？」

「……運び屋をやっている」

「家族いますか？」

「……一人だ」

「住所は？」

「……旅をしているのでな、今は……ない」

「この六課の敷地内に入った記憶は？」

「……ない」

「気絶する前の、最後の記憶は？」

「……知り合いに頼まれて、廃屋の調査をしていたら、魔法陣があって、それに触れた後のことは覚えてない」

「魔法陣……うーん」

八神はやては、そこで質問を止め、なにやらクリップボードに書き込みを始めた。

「その魔法陣って、突然光ったりしませんでしたか？」

「……ああ」

確かにその通りだ。触れた瞬間に、アレは光ったのだ。
「……まあ、質問は以上です。わざわざすいませんでした」
八神はやては一礼すると、今度は少々前のめりになって話し始めた。
「さて、あなたの質問から色々考えてみるとですね、クラウドさん――あなた、ワープしてますよ」
「……そうか」
「意外と驚きませんね」
「予想はしていた」
突然、「ワープしている」と言われても、クラウドはまったく驚かなかった。いや、むしろ、他者から一様の答えが得られて、安心した部分もある。その得られた答えが、自分の予想と一致していた、というのもあるが。
「あなたみたいな、突然、ここに来てしまった人のことをですね、私たちは『次元漂流者』と呼んでいるのですが、私達には、あなた達を本局員が来て、元の世界へ返せるようになるまで、保護をする義務があるんです」
「ほう……」
そう告げられ、とりあえず飢え死にの可能性はなくなったとほっとした。だからといって、根本的なモノの解決にはなっていないが。
「それで、何時帰れるんだ?」
そう、それが問題なのだ。帰れるのが、五年十年先では、意味がない。
「それは……」

八神はやては髪を掻き揚げた。

「分からないです。一週間後か一ヵ月後か、何時になるなんて」

その言葉は、クラウドの心に、一気に暗雲を立ちこませた。

「色々と、検査やら調査やらが必要で……何せ、数も数ですし」

自分は、もしかしたら、永遠にあそこに戻れないのでは――

「とりあえず、寝泊りするための部屋は、手配しておきます。後で人を寄越すので、少しここで待ってください」

そう言い残して、八神はやては足早に医務室を出て行った。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

壁には時計らしきものがあったので、一応の時間は分かった。どうにも、八神はやてが出て行ってから一時間も経っていないうちに、そいつはやってきた。

「アンタを部屋へ案内する、不動遊星だ」

夜になって、ノックの後に、そう言って部屋に入って来たのは、顔の左側に大きな刺青を持った細身の青年だった。

精悍な顔つきをしており、目には揺らがない意志のようなものが

垣間見える。青のジャケットを着ており、腰には長方形のホルスター。
そして、何よりも特徴的なのは髪型だ。黒髪なのだが、方々に逆立たせており、金のメッシュが入っている。
クラウドは、不動遊星に連れられるまま、施設の中を歩き回った。
『部屋』といってもどんな部屋なのか皆目検討が付かない。せめてこの廊下のようにごみが余りないといいのだが。
そして、ここの廊下の壁は、どこも鉄製らしいのだが、冷たい配色はされておらず、クリーンなイメージを与えるカラーリングをしている。
不動遊星は口数が少ないらしく、二人はしばらくの間、黙々と歩いているだけだった。

「……そういえば、クラウドも次元漂流者と訊いているんだが？」
「ああ、そうだが……」

沈黙を破ったのは不動遊星からだった。
自分のことは、どの程度ここの人間に知られているのかは分からないが、どうもこの男には、あの部隊長も事情を話したらしい。

「実は、俺も次元漂流者だ」
「……何？」

少なくとも、不動遊星のこの発言は、予想していなかった。
クラウドは、驚きを隠せずにいた。よそ者の道案内を頼まれるくらいだ、ある程度ここに馴染んでいた人物だと勝手に思っていた青年が、自分と同じ漂流者なのだという。

「……何時、ここに来た」
「一ヶ月ほど前だ」

一ヶ月前――その時期は、クラウドがちょうど元居たところと距離を置くようになっていた頃だ。だからどうした、というわけではないが。

「……そんなに居るのに、まだ帰れないのか？」
「ああ。どうにも俺が居た世界は、ここから遠いらしい。位置情報すら掴めてないと、昨日、連絡が来たよ」
「……」

クラウドは、押し黙った。一ヶ月経っても、元居た世界に帰れない者がいるという事実にではなく、その者が、あまりにも気にしていない様だったから。
「あんたは……帰りたくないのか？」
その質問を、ぶつけられた黒髪の青年は、少し驚いた顔をした。
それでも、クラウドは問わずには居られなかった。このような異郷の地で、何故、ああも平気な顔をしていられるのか。
「不安では、ないのか？　どうせ、アンタもワケのわからない、ナニカの所為でここに来たのだろう？　それなのにここで一ヶ月もここに居て、不安ではないのか？」

ある種の、センチメンタルから沸いてきたのかもしれないその問いを、クラウドは言った。まるで自分の気持ちを吐き出すように。
しかし、不動遊星はその問いに対して、異常なほど冷静に返してきた。

「不安は、ないな」
「……何故だ？」
「ここの人たちは、皆良い人だ。それに、俺は信じているんだ」
「……何をだ？　何時か、帰れることか？」
あんな、確証のない口約束をを信用するというのか？そう言ったら、

彼は首を横に振った。
「いや、俺が信じているのは、あっちの世界の仲間の事だ。あっちの仲間たちが俺が『帰ってくる』と信じている限り、俺はきっとあいつらの元に帰ってこれる。だから、俺はあいつらを信じるんだ。あいつらが、俺が『帰ってくる』と思っていてくれると」
「……」
普通なら「何をばかな」と言えただろう。しかし、クラウドには――仲間を拒絶した彼には、それはできなかった。信じていると言い切った彼の背中は、自分にとって、遥か遠くにあるもののように感ぜられた。

turn1　『クラウド・ストライフ』（後書き）

今回は大分長かったのですが、多分次回もこんな感じです。
感想ツッコミ誤字脱字報告「なぁにこれぇ？説明しろし」などもあったら、よろしくお願いします

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1016ba/

---

swarm bonds――叙情的な魔法少女たちと追憶のHero

2012年1月11日23時55分発行